

流灯 Floating Lantern HIROSHIMA SPEAKES OUT

掲載 URL <https://h-s-o.jp/ryuto/ja/s3/24.html>

「流灯」は1970年、被爆25周年を記念して、原爆で亡くなった国民学校の児童生徒、教師の碑(原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑、1971年8月4日除幕)を建立しようという運動の一環として、犠牲になった子どもたち、教師の父母、兄弟から寄せられた手記である。

1945年当時広島には、市内に居住していた者、通勤していた者、建物疎開のために動員されていた者などあわせ、昼間人口が約40万人いたと考えられている。8月6日午前8時15分、広島に投下された一発の原子爆弾は、この40万人の内、同年末までに約三分の一にあたる14万人の命を奪い、残された者の生活をも破壊してしまった。その中には国民学校に通う児童約2000人と教師約200人も含まれていた。

当時小学4年生から6年生までの多くの学童は、日ごとに激しくなる本土への空襲を避けるため、親から離されて郊外に集団疎開させられていた。市内に残っていた子どもたちのほとんどは乳幼児と一年生から三年生の幼い子どもたちであった。この幼い小学生達は毎日学校に通っていたものの、勉強することはできず、校庭を耕し、野菜を植え、水遣りなどをする日々であった。当時の食糧不足はそこまで深刻だった。8月6日も子どもたちは元気に「行ってきます。」と家を出て、学校に集まっていた。そしてあの原爆が炸裂したのである。

この手記集は、元気に家を出て行った我が子の姿を、二度と見るができなくなった親たちの叫びである。なぜこのような幼い子どもたちが犠牲にならなければならなかったのか？この子達に何の罪があるというのだろうか？戦争を始めるのは一部の政治家かもしれない。そしてすべての大人にはそれを止めるために手を尽くさなかったという罪がある。しかし子どもには何の罪もない。勝つまではほしがってはいけないと空腹を我慢し、戦地に送られる兵士を「万歳」といって見送り、国のために死ぬことを美德と教えられ、そして灼熱の地獄の中で焼かれ、この子どもたちは亡くなっていった。

現在でも世界各地で戦争が絶えることはない。そしていつもその犠牲になるのは幼い子どもたちである。この手記を読まれたみなさんが、決して罪のない子どもたちの命を奪い、我が子を失い悲しみに打ちひしがれる親を生み続ける戦争に加担する大人にはならないと誓ってくださることを心から願っている。

この手記をより多くの皆様に読んでいただくために、私ども「HIROSHIMA SPEAKS OUT」は、このサイトに「流灯」を掲載することとしました。これら手記の掲載にあたって許諾をいただきました広島教育研究所に心から感謝いたします。

HIROSHIMA SPEAKS OUT 浜井道子

24. 姉、梶矢文子のこと

姉の文子と私が被爆したのは、広島駅構内の西端から 100 メートルも来た所の分教場で、今の回生病院のちょうど向い側になります。

当時、姉は国民学校初等科 3 年生、わたしが 1 年生でした。空襲が激しくなり、もう荒神小学校へも行けぬということで、私の家から 200 メートルほど先に開かれた分校、教室代わりの民家（中西宅 イモトといわれる先生が教えられていたそうです）が被爆場所です。当時は疎開というものがあり、姉も 20 年 4 月にいったん母の里である山県郡大朝町に疎開し、新庄小学校に通っていたのだそうですが、7 月の中ごろ、母が夏の着替えを持っていくと、帰るといって泣きじゃくり、母にしがみつぎ、バスに乗ろうとしてもまだ手をはなさないで、母も、「死ぬのなら、この子といっしょに。」と覚悟を決めてつれて帰ったのだそうです。

8 月 3 日に、新庄の祖母が死んだという電報が入りました。当時、証明書がなければバスにも乗れなかったそうで、父がそのために半日近くも動き回り、やっと 3 日の夕刻から、紙屋町のバス停の列に並んだのだそうです。はじめは姉もつれて行くつもりでいっしょに行ったのに、どうしても許可がとれず、けっきょく、年少の私だけにしか許可がおりなかったのだそうです。3 日の夕刻から並んで、やっと順がまわってきたのが 4 日の 2 時過ぎ、新庄に着いたときには、もう葬儀も終わっていたということです。

その日は泊って、5 日に納骨し、5 日の晩も泊っていくように強くすすめられたのを姉（当時 10 歳）を残してきているからとふりきり、広島に着いたのが 5 日の夜の 9 時近くだったということです。あの日、「姉もいっしょに行っておれば、もちろん 5 日の夜も泊っている。」と両親は言います。家に着いたとき、姉はひとりで寝ていたそうです。

あくる日、6 日の朝、空襲も解除になったということで分校に行かせることにし、私たちを母は見送ったわけです。8 時 15 分という時刻は、ちょうど朝の清掃時間になっていて、姉と私は組になって玄関から奥へ通じる廊下をふく割り当てになっていたそうです。確かに、玄関の上がり口で、雑巾を動かしている姉の姿を思いおこすことができます。閃光の一瞬は、忘れることができません。わたしは玄関で下敷きになりました。壁をやぶり、柱のすき間からはい出して、とにかく牛田の山中に逃げのびているのです。

ところが、姉の死体を父が発見したのは、その家の奥まったところにあった台所だったそうです。柱が胸の上に落ちての即死で、けがも出血もない、非常に静かな死に顔だったそうです。口もとにほほえみさえあったそうで、今でも母は、「何をおもい出したもんやら、あの子は心のやさしい子じゃったから」と、そのことを言って涙ぐみます。父は、姉の死体を出し終わると、すぐ私の死体を求めたそうです。かわらや天井を破ってはのぞき込むうちに、火がまわってきて、ついには炎の熱で耐えられなくなり、その場を立ち去ったそうです。

わたしが父母と再会したのは、6日の7時過ぎでした。隣家の福馬さんという人に避難先で出あい、夕刻になって東練兵場に連れ帰られたのです。軍艦山と呼んでいた丘のふもとに、無事な父と（当時町内の防衛隊長をしていたようで、無事であったゆえに食糧の世話から救助、死体の確認から処理までと動きまわり、ひどいおう吐と下痢になり、歯まで抜け落ちてしまったということです）父のそばには、姉の死体が静かに寝いているように横たわっていました。そして、からだじゅう包帯を巻き、その包帯にもこぼれるほど血がにじんでいる母が（爆風でこっぴみじんになったガラス50以上も体内に刺さり込んでいたのです）ひざを抱え込むような姿で、死体の横にじっとうずくまっていました。南側に向かって市の中央部が、まっかに燃え上がっていました。被爆のあの瞬間、わたしが玄関近くにおり、姉が奥まった台所で即死したことを、わたしは父にこう説明したそうです。

「朝の掃除で雑巾がけをしていて、バケツの水がよごれた。わたしがかえに行くべきなのを、いやがって姉に行かせた。姉はバケツをさげて台所まで行き、わたしが玄関近くにそのまま残っていた。・・・」

あのとき、わたしがバケツの水をかえに行っていたら、姉の死と私の生とは逆になっていたかも知れない。きっと入れかわっていたでしょう。わたしは、そのくらいの子どものを見るとき、感慨にひたることがあります。母もそのときのままの姉の姿が心の中に生き続けているらしく、3年生ぐらいのおかっぱ頭をみると、ふと立ち止まってしまう事があります。

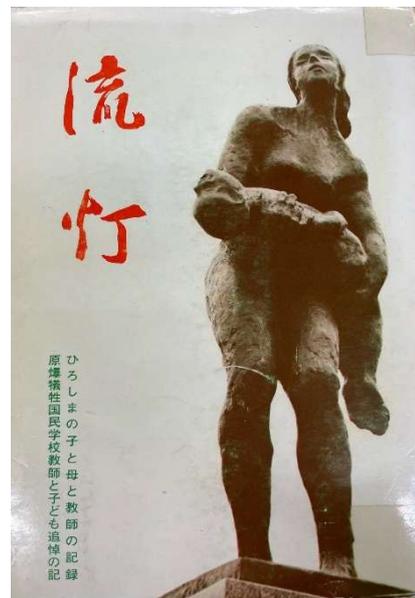
昨年、25年めでも、8月6日には泣いてしまったそうです。今年、26年めでも、またきつと、母は泣いてしまうでしょう。

梶矢 文昭（広島市大須賀町）記（1971年）

被爆死

梶矢 文子（荒神国民学校3年生）

和文機関紙「平和文化」（No.206, 令和3年
（2021年）3月号）



被爆体験記

私の被爆体験と戦後突然の閃光

今から75年以上も前のことになる。

昭和20年8月6日。前夜からの空襲警報で何度も防空壕に逃げ込んだ。早朝、警戒警報のサイレンが鳴って防空壕に入った。しばらくして警戒警報解除のサイレンが鳴って防空壕を出た。7時31分だったという。

疎開先から帰っていた国民学校三年生の姉と一年生の私は一緒に、町内に設けられていた分散授業所に登校した。分散授業所とは、空襲が激しくなつてからは距離の遠い本校までは行かず、地域ごとにお寺や民家を借りて設けられていた臨時の教室のことである。私が通っていたのは、今の広島駅新幹線ホームの西端付近の民家を借りて設けられていた荒神町国民学校大須賀分散授業所であった。

姉と朝の掃除に取り掛かって玄関の方を雑巾がけしていた。が、バケツの水が汚れ、水替えに姉の方が台所に入って行った。私は、何かの気配を感じたのか手を止めて、居間越しに庭の方に目をやっていた。

その時、ピカーッともの凄い閃光が一带を覆った。庭の八手の葉が真っ黒になって溶けるのを見た。次の瞬間、ドンンと爆風が襲いかかり柱や天井が崩れかかってきて、私は何かに叩きつけられ、真っ暗になった闇の中で身を縮めていた。どれくらいの間を耐えていたのか、だれも助けに来てくれることはなかった。

土煙が少し収まったのか、上の方から光がもれてきた。「あっ、天井が破れている」。あとは、死に物狂いで這い上がっていった。壁土や、藁の腐ったような臭いの中、柱の隙間をかいぐり、何かを押し上げ、懸命に抜け出していった。そこは崩れた屋根の上だった。

目の前の道を異様な人たちが列となって逃げていた。周りを見ると、どの家もどの家もつぶれていた。私は、逃げていく人の流れに交じって懸命について逃げた。線路に向かう上り坂になった時、それは長い長い避災者の列であることが分った。側溝には馬が仰のけになってもがいていた。

饒津神社横の川に沿う道に出たとき、対岸の白島町の、川へと下りる石段には人が雪崩のようになって川原へと下りていた。川には、沢山の人が浮き沈みして流れているのが見えた。私は、人の流れに遅れまいと懸命について逃げた。川沿いの崩れた家から火が噴き出してきた。

私は瓦礫の道をはだして逃げていた。いや、ほとんどの人がはだしだったろう。二葉山の中腹まで被災者の流れに何とかついて逃げた。そこはもう、被災者でいっぱいだった。眼下の広島街がごうごうと燃え出していた。黒煙を巻き上げ、まさに一面が火の海となっていた。

東練兵場をさまよう

夕刻になって火が衰えをみせ始め、避難していた人々は山を下り始めていた。私も、そこで出会った近所のおばさんに連れられて山を下りた。もし、父や母や姉が

生き残っておれば避難しているはずだと思われる場所へ、鶴羽根神社から広島東照宮前を抜け、広島駅の北に広がる東練兵場へと出た。そこは一面、被災者で埋め尽くされていた。いつの間にか近所のおばさんとははぐれていた。一面に広がるうめき声や「水をくれえ」という声の中を当てもなく歩き回った。

後に作家となった今西祐行（いまにしすけゆき）は、救援のため東練兵場に来ているが、その時の様子を「わたしたちは、地ごくのまん中にたっていました。」と書いている。

さまよっている私を近所のおじさんが見つけてくれ「お父さんもお母さんも生きとってじゃ。じゃがのう、お母さんは血もぐれ（血まみれ）じゃ、早う行かにか、ありゃあ死ぬるで」と言われた。自分では覚えていないが、その時、私は大泣きをしたそうである。私は、頭部から顔面にかけて血を流していたそうだ。

母はガラス片が50個も60個も体に突き刺さり血だらけになってうめいていた。左の眼球にも突き刺さり、それを父が抜きとっただけで、治療はなく左目は失明。何十の傷痕と身体の中にまだ残っていたガラス片とともに、それでも94歳までを生き抜いた。

うめき続ける母の前の草の上に姉が横たえられていた。少しほほ笑んでいるように私には見えた。姉は分散授業所で柱の下敷きになり即死だったそうだ。同じ授業所にいた二年生の友達も即死していたことが後で分かった。しかし、その学校の記録では原爆による死亡児童は「0」となっている。木造校舎であった多くの学校で、調査の時点で分散授業所での死亡児童の確認が取れていなかったのである。

父は、傷を負いながらも母や姉を瓦礫から引き出したあと、救援活動に動き回っていたそうである。

私は血だるまの母のそばに寄り添い、まだ燃え続けている広島市の市街を前に、一面の被災者のうめき声の中、8月6日の夜を過ごした。

被爆後を生きる

その後も東練兵場で数日をすごしたが、近郊の人々からの救援のむすび、軍人から配ってもらった乾パンの袋、その袋の底の方にあった金平糖を口にしたときの甘味は、今も、感謝の気持ちと共に心にある。学校も、戦後しばらくは「青空教室」であった。昭和22年か23年の平和祭（平和記念式典の前身）で、現在の平和記念公園内に当時あった「平和塔」のステージに子供会で出演、原爆で両親を失っていた友と踊りをおどったこともある。

昭和23年にヘレン・ケラー女史が広島を訪れられた時、学童全員が引率されて沿道に並び夢中で手を振ったのを今でもはっきり覚えている。朝鮮動乱のころ、まだ焼け跡や瓦礫の山は残っており、掘り返しては金属類を集め、小遣いにしていたこともあった。

語るとき

被爆のとき、東練兵場近くの広島東照宮に逃がれていた作家原民喜は、生き残った自分に自問自答しながら手帳にメモを残した。「コハ今後生キノビテコノ有様ヲツタヘヨト天ノ命ナランカ」。語るとき、そのことばを時に思い起こしている。

プロフィール [かじや ふみあき]

爆心地から 1.8km の地点で被爆。以後も、広島市内に住み続ける。

退職した年に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足。以後 20 年継続中。また、講習を経て令和 2 年より広島平和文化センターの被爆体験証言者にもなる。

広島ペンクラブ会員。東京 2020 オリンピック聖火ランナー（予定）。

公益財団法人 広島平和文化センター

徳島新聞デジタル版 (2021/08/09 13:00)

原爆の日 「三度許すまじ、原爆を」被爆者の願い

警報が鳴るたび授業はストップ 分散授業所で勉強

私は今 82 歳です。原爆に遭った時は 6 歳でした。当時は国民学校の 1 年生で、今のマツダスタジアムに一番近い学校です。入学してすぐは学校に行っていました。ところが、だんだん空襲が激しくなってきます。空襲のサ



イレンが鳴ったら授業をストップして、先生は子どもたちを家に帰していました。なんでかなと思うんですけど、昭和20年ごろ、ほとんどの学校は木造校舎でした。木造では子どもたちを保護できないので、家に帰して家族で守り合うというシステムになっていたのではないかと思います。

警報が「うー」と鳴り出すと授業がストップして、荷物をまとめて学校から自宅まで1年生が走って帰る、非常に危ない状況でした。おそらく7月に入ってからでしょうか。学校で授業は行わず、「分散授業所」という臨時の教室を町内ごとに作り空き家や寺にできた臨時の教室に通っていました。原爆に遭ったのも、分散授業所です。当時は夫が出兵し残った妻と子どもが広島は危険だからと田舎に帰るので、かなりの空き家があったようです。大きな空き家を借りて、そこに同じ町内の子どもが集まって勉強みたいなことをしていました。

きょうだいのうち姉1人が原爆で犠牲に

私にはきょうだい6人いて、1人は病気で5歳ぐらいの時に亡くなりました。戦争時生き残っていたのは5人です。一番小さいのが私、次男は中学を卒業して予科練で関東方面におり、長男は陸軍に入って九州にいました。姉2人のうち1人は生き残りましたが、おそらく原爆関連の病気になって亡くなりました。もう1人は3年生でした。当時3年生は、広島に残ることができませんでした。3～6年生は強制的に疎開させられていました。学童疎開で市内に住むことができず、安全な所に避難させられました。疎開には縁故疎開と集団疎開があり、山間部などの親類に子どもを預けるのが縁故、集団で周辺の寺に預けられたりするのが集団疎開です。いろんな事情があって残っている子どももたくさんいて、それぞれ3分の1ずつぐらいいました。姉の場合は3年生で、一時は縁故疎開、新庄という街で、今の新庄高校のすぐそばの親類に預けられました。預けられたままで底に残れば、死ぬことはなかった。ところが、母親が夏の着替えを持って行った時、やっぱり3年生だったからでしょうかね。「(母親と)一緒に広島に帰りたい、帰りたい。お母さんと一緒がいい」と一晩中すがりついてせがみました。でも「広島は危ない。いつ空襲に遭うか、いつ死ぬかも分からん。だから新庄におりなさい」と説得し続けるんですけど、ある事情があって、母親はついに3年生の姉を広島に連れて帰る。で、その3日後、「ドーン」ですよね。原爆に遭って姉は死にます。死ぬか生きるかなんてことは自分で選択することができません。誰がいつどこで死ぬかどうやって生き残るか、これは推し量ることも決めることもできない。まさに運としか言いようがないと思います。姉は私と一緒に分散授業所に行き、原爆に遭う。私は生き残り、姉は即死でした。

T字の橋が原爆投下の目印に

原爆は、広島市内の相生橋を狙って落とされています。相生橋がTの字になっていたのので、目立つ橋だったんでしょう。実際は200メートルぐらいずれて、島病院の上空でさく裂しています。距離にして1・8キロの所で、私は原爆に遭ったということになります。米軍がサイパンから日本に飛んでくる際は硫黄島があるので、やすやすとは来られなかったんですが、3月に硫黄島、沖縄を6月につぶし、B 29は悠々と日本に飛んで来ています。

戦争末期には、空いっぱいのB 29爆撃機が爆弾をバラバラと落としました。私たちは庭や空き地に穴を掘った防空ごうに逃げ込んでいました。そして8月6日の朝、7時40分ぐらいでしょうか。母親に見送られ、姉と一緒に学校に行きました。この日、7時9分～31分の間、警報が出ました。警報が出ると当然学校には行きません。防空ごうに入っていましたが、7時31分に解除になります。解除になったら、防空ごうから出て姉と一緒に学校に行きます。7時の警戒警報は何だったのかというと、B 29が1機、広島に侵入したんです。天気を確認しに来ました。曇っていたら広島に落とせない。広島が曇っているかを確認しに来た1機、それに対して警報が出たんです。原爆を積んだ飛行機は2機です。その時には警報は一切出ていません。

姉は台所、私は玄関 柱の隙間で命拾い

6日は分散授業所で朝の掃除をしていました。姉は汚れたバケツの水を替えて台所に、私は玄関の床を雑巾で拭いていました。これが運命を分けます。昔は木造の家の場合、地震が来たら柱が多い所に逃げろと言われていました。一つは押し入れ、二つ目はトイレ、三つ目は玄関です。広い所にいるとどさっと落ちてくるけど、トイレにいたら柱が多いからなかなか崩れない。たまたまトイレにいたから助かったという手記はかなりあります。私は玄関でした。

せん光の瞬間、これはもう光りました。全面がピカーッと光って、次の瞬間はドーンです。だから当時の人は原子爆弾という言葉は使わず、「ピカドン」と呼んでいました。遠くにいた人は広島の上空にキノコ雲が立ち上ったと証言する人が多いです。

私は柱の下敷きで、これは何と言えればいいのでしょうか。運が良かったと言うのか、上様に助けれたと言うのか、柱がテントの屋根みたいに重なって、下にできた空間にうずくまっていた。周りはいしばらく真っ暗でした。そのうち、天井の破れている所からだんだん明かりが見えてくる。その破れた穴を目がけて抜け出そうと、それは必死でした。生きるか死ぬかでしたから。必死になって柱の間をかいくぐり、天井の破れた穴からはい出ました。私の場合は誰の助けもありません。手記などで父親や母親に助け出されたという話もありますが、私は分散授業所にいて親

は離れた所にいたので、とにかく自力で柱の間をくぐって壁を押し上げながら抜け出しました。

自分で自分を褒めてやりたいという言葉がありますが、今考えると6歳の自分はよく頑張ったものだと思います。屋根からはい出すと、目の前をたくさんの人がぞろぞろと逃げていました。長い長い列です。一生懸命、父親と母親を探して歩きました。姉は死んでいました。

「母親は一生涯、8月6日になると涙が止まらないぐらい泣いていた」

母親はいつまでも8月6日が来ると、泣いていました。なんでもか。着替えを持って疎開していた姉の所に行き、一晩泊まって翌日帰る時に、姉は母親が乗ったバスを追い掛けて来たそうです。その頃のバスはガソリンではなく、炭をたいて走りますから、スピードは出ない。そのバスを一生懸命姉は追い掛けて来て、それを見た母親はついに我慢できずに、バスの運転手さんにバスを止めてもらい、連れて帰って、その3日後に姉は原爆で死んだ。そのことをもう悔やんで悔やんで、一生涯母親は、8月6日になると涙が止まらないぐらい泣いていました。

昭和20年末までの死者は、公的には14万人±1万人とされています。爆心地より2キロ以内はほぼ壊滅、私の家は1・8キロだったので壊滅し、その後燃え上がっています。原爆被害には熱線、爆風、放射能、そしてもう一つ、これは被爆者じゃないと分からないところがありますが、風評被害というものがあります。特に、女性は被爆者であることを隠している人がいっぱいいます。なぜか。被爆者の女性とは結婚するなといううわさがたくさん回りました。男の場合もそうです。私も、被爆者が結婚してもいいんだろうかと悩みました。女性の場合、結婚後、普通の子が生まれた時に初めて、実は被爆者だと打ち明けたという話をたくさん聞きました。

「三度ゆるすまじ、原爆を」

広島原爆は半径2キロ。今の核兵器、原子爆弾は、少なくとも広島型の100倍とされています。200キロになります。200キロと言えば、岡山、鳥取、島根、そして山口、四国は全部入ります。本当に三度こんなことがあっちゃいかん。広島と長崎で終わり。今の核兵器が使われたら、まさに世界中が大変なことになる。なんとしても三度目は許してはならない。「三度許すまじ、原爆を」というのが私の今の思いです。



梶矢 文昭（かじや・ふみあき）

昭和 14 年広島市東区出身

広島大学教育学部卒

1962 年から矢賀小学校・幟町小学校・広大付属小，1994 年から長束小学校校長

小学 1 年生のときに広島駅の近くで被爆。昭和 37 年から広島市で小学校教諭や校長を務める。平成 11 年 3 月に定年退職。嘱託職員を経て，平成 13 年に「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を発足し，事務局長に就く。梶矢さんは当時 6 歳で，荒神町国民学校（現・荒神町小）の 1 年生。爆心地から 1・8 キロにある学校（分散授業所）の建物で被爆した。自身は頭などにけがをし，同じ場所にいた 2 歳上の姉は柱の下敷きになって亡くなった。

昭和 20 年 8 月 6 日の朝，広島駅近くにあった荒神町国民学校 1 年生だった私は，二つ上の姉と一緒に分散授業所に行きました。掃除に取り掛かったころ，あたり一面を光がピカー！と覆い，次にズドーン！熱線と爆風で建物は一瞬にして潰れ，私

は下敷きになりました。崩れた建物の下から何とか抜け出し、逃げて逃げて山にたどり着きました。そこから見下ろした広島街は、真っ赤に燃え上がっていました。夕方までごうごうと燃えとったんです。

夕方になって家族を探しに山を下り、広島駅の北側にあった東練兵場に行きました。そこは、普通の人相じゃない人たちで埋め尽くされていました。「水をくれ、水をくれ」という声が目につきました。でも6歳の私にはどうすることもできませんでした。飼い主を探す犬がうろうろしていたのも覚えています。

偶然にも、私はその日のうちに両親と再会できました。でも朝まで一緒だった姉は死んでいました。姉は当時、現在の北広島町（広島県）の親戚の所に縁故疎開していましたが、着替えなどを持って行った母に「連れて帰って。うちゃ死んでもええ、死んでもええからお母さんと一緒に死のう」と訴えたそうです。諭されて一旦は諦めた姉ですが、広島に帰る母が乗るバスを泣きながら追いかけてきたんだそうです。の姿を見かねた母が「死ぬときゃ一緒に死のう」と、8月2日に広島市内に連れ戻っていたところに、原爆が落とされました。

母は8月6日になるといつも泣きました。娘を死なせてしまったと……。母も体中にガラス破片が50、60と突き刺さり、眼球にも刺さるほどの傷を負っていましたが、94歳まで生きてくれました。頑張ったように思います。母と子が一緒にいることすら、命がけの時代だったんですね。

私は運よく生き残り、昭和30年代に広島で小学校の教員になりました。被爆体験を何らかのかたちで子どもたちに伝えたいとは思っていましたが、当時の学校での平和教育は、組合（日本教職員組合）が中身を考えて講演するというイデオロギー的なもので、校内に被爆者の教員がいても、証言する場はありませんでした。

時代と共に、広島市の平和教育の方針が変わっていきました。私が長東小学校の校長になった平成6年、職員から「子どもたちに被爆体験を話してほしい」という声が上がったんです。そこで1～6年生まで、特に低学年に伝えやすくするために、を描いて話しました。小学生500、600人が相手ですから、後ろの児童にも見えるように大きな画用紙にパステルで描きました。それが私が紙芝居で被爆体験を伝えるようになったきっかけです。最初に描いたのは、姉が死んでいたシーン。絵を少しずつ追加して、今も使い続けています。

やはり体験した人が直接話すということに意味があると感じ、定年後に勤めていた広島市教育委員会での嘱託勤務を終えた平成13年、「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を組織しました。以来、登録メンバーの被爆者が、子どもたちへ被爆体験を直接伝えています。幼稚園や低学年には、身振り手振りを大きくして、高学年にはより具体的に、日本が戦争に至った経緯や核爆弾の被害なども解説しています。私の語りは45分程度ですが、子どもたちはよく聞いてくれますね。

紙芝居にも描いていますが、「三度許すまじ原爆を、世界の町に」というメッ

セージを伝えています。これは昭和 25 年くらいまで広島市民がよく歌っていた歌の一部です。もともと「三度許すまじ原爆を われらの街に」という歌詞ですが、私は「世界の町に」と変えています。

今、いくつもの国が核を持ち、世界におよそ 1 万 3000 発の核があるといわれています。それは持っているけど使ってはいないということ。世界の平和は緊張のバランスの中で保たれているのです。現代の原子爆弾が広島に落とされたとしたら、その被害は半径 200km に及ぶといわれています。中国地方はもちろん、被害は四国や九州の一部におよび、灰の被害を考えると、2・3 発落とされると日本には逃げる場所はなくなるでしょう。使われたら使い返す、そんな世界になれば人類の存続どころか、地球は滅びてしまいます。持っている核をなくすことは早急には難しい。だから、核を使うことは許さないということを、世界で申し合わせるのが大事だと思います。

三度目は許しちゃいけないのです。それを一人でも多くの子どもたちに伝えていきたい。そして彼らが大人になったとき、自分の子どもに伝えてくれることを願っています。

(2021 年 5 月 18 日読売新聞)

6 歳の時に原爆で姉を失い、自らも被爆した広島市安佐南区の梶矢文昭さん（82）は「平和の火」を手に祈りをささげ、「多くの人が命を落としたこの公園で、二度と核兵器を使わせないと誓うことができた」と空を見上げた。

1945 年 8 月 6 日朝、爆心地から約 1・8 キロの国民学校の授業に使われていた民家で、閃光せんこうと爆風に襲われた。直前まで一緒にぞうきんがけをしていた姉の文子さん（当時 9 歳）は大きな梁はりの下敷きになって亡くなった。

悲しみを払拭ふっしょくさせたのは、1964 年の東京五輪だ。小学校の教師となり、教え子とテレビで観戦した。原爆投下日に生まれた最終聖火ランナーの坂井義則さんや、マラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉さんの走りに「日本は復興した五輪は平和のシンボルだ」と感銘を受けた。

2 度目の東京五輪に「廃虚から立ち直った広島を走りたい」と聖火ランナーに応募。この日は、トーチキスをした戦争経験者の中谷雄英さんと 2 人で、原爆死没者慰霊碑に一礼した。「点火式を見た人が、少しでも平和に思いをはせてくれれば」。トーチを手に晴れやかな表情を見せた。